火山学のアウトカム評価―噴火しなかった岩手山の事例調査

Outcome evaluation for volcanology ; a case study of not erupted Iwate volcano.

須藤 茂 [1]
Shigeru Suto[1]

[1] 産総研
[1] AIST

火山研究の成果には，論文発表などのアウトプットと，実際に役に立つ災害軽減などのアウトカムがある．評価事例の少ないアウトカムの成果の検討のために，先に行った三宅島 2000 年噴火，有珠山 2000 年噴火の場合と同様に，今回は 1998 年に噴火騒動のあった岩手山周辺の住民に対するアンケート調査を実施し，火山研究成果がどのように評価されているかを判断する資料を得た．

調査方法は，旧松尾村，旧西根町，旧玉山村，滝沢村，雫石町のうち，比較的岩手山に近い側の住人の中から，電話帳により無作為に抽出して該当者を選定し，調査用紙を郵送し，回答を返送してもらう形で行った．各町村には同数を，2006 年に送付した．回収率が悪いこと，男女比では男性の方が多いこと，比較的高年齢の回答者の割合が多いことなどは三宅島及び有珠山での調査結果と同様であった．

岩手山の頂上まで登った人は 7 割，途中までの人も含めると 8 割であり，よく親しまれている山であることはわかる．しかしながら，江戸時代，1732 年の噴火については，焼走溶岩のことも含めて知っていた人は 4 割弱，逆に知らなかった人は 2 割強であり，歴史時代の噴火で，溶岩流が観光地として有名であっても，地元住民のすべてが噴火を認識しているわけではないことが明らかになった．

1998 年 6 月に盛岡地方気象台から噴火の可能性もあるとの臨時火山情報が出されたときには，9 割以上の住人が岩手山に噴火もしくは何らかの現象が起きるとの印象を得ていた．同 9 月 1 日の雫石に被害をもたらした地震が起きた時点では，半数の住人が岩手山が噴火するかもしれないと考えていた．なお，それ以前に，岩手山ではなく，三石山付近が隆起していたことが地震後に発表されたことについては知っていた住民は 4 割であった．一連の噴火騒動の最中にどう思っていたかとの問いに対しては，半数がいつ噴火するかと心配であったと答えている．噴火するかもしれないとは思ったがあまり心配はしなかった住民 3 割と併せると 8 割以上の住民が噴火の可能性を認めていたことになる．しかしながら噴火は起きなかった．この結果に対して騒動後には，噴火しないのに噴火するようなことを言われてまったく迷惑な話であったと答えた住民は 1 割弱であり，約 8 割は，噴火はしなかったが，噴火の災害について考える機会ができてよかったと答えている．火山研究者に対して，噴火騒動の時には，約半数の住民が，噴火するのかしないのか正確な情報を出して欲しかったと思っており，4 分の 1 は，噴火するのかしないのかわかりそうにないので期待しなかったと答えている．一方現在は，噴火することが確実なときにだけ情報を出して欲しいと思っている住民は 6 分の 1 であり，6 割は，噴火する可能性があるならば確実でない段階でも情報を出して欲しいと答えている．

岩手県及び各町村はハザードマップを公表したが，これを詳しく見たと答えた住民は 8 割であり，ざっと見た住民と併せると 9 割を超えていた．これは有珠山の例に比べて，はるかに多い．

各調査・研究機関から発せられた情報について，役に立ったものだけでなく，役に立たなかったものについても，その内容を具体的に記入した住民は非常に少なく，各調査・研究機関の印象は非常に薄かったようである．とりわけ，発表者が属している産業技術総合研究所は，旧所名である地質調査所よりも知名度が低く，機関として最低の認識度であった．逆に，広報活動に熱心であった地元大学の教授及び地熱企業の地質研究者個人の活動はよく評価されている．

岩手山の次の噴火の時期，場所，規模などを火山研究者は適確に予知してくれると思うかとの設問に対して,「そう思う」と答えた住民が 46%，思わないが 45%であった．これは，有珠山の調査結果と大差ない.「そう思う」と答えた住民が 2 割以下であった三宅島の例とは大きく異なる．研究者の間違った判断によるダメージが，住民の一部にのみ限られ，経済的，精神的被害が地域全体としてはそれほど大きくならなかったことが，岩手火山の噴火予知が成功しなかったにもかかわらず，研究者への期待，評価が有珠山並に大きいことにつながっているのかもしれない．